



モニタリングサイト1000

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査 ニュースレター

2015年 春期概要

環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

2015年春期の結果概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2015年度春期概要をお知らせします。

春期の個体数は2010年以来最小に

2015年度春期調査は、2015年4月1日から2015年5月31日までの期間実施されました。107ヶ所の調査サイトで調査が実施され、このうち一斉調査(4月19日を基準日とした前後1週間の調査)への参加は99ヶ所でした。一斉調査期間では、シギ・チドリ類38種27,493羽、ツクシガモ723羽、ヘラサギ13羽、クロツラヘラサギ203羽、ズグロカモメ44羽が記録され、春期の全サイトの最大個体数(調査期間内に記録された各種個体数の最大値)の合計では、シギ・チドリ類50種76,764羽、ツクシガモ2,589羽、ヘラサギ31羽、クロツラヘラサギ274羽、ズグロカモメ829羽が記録されました。

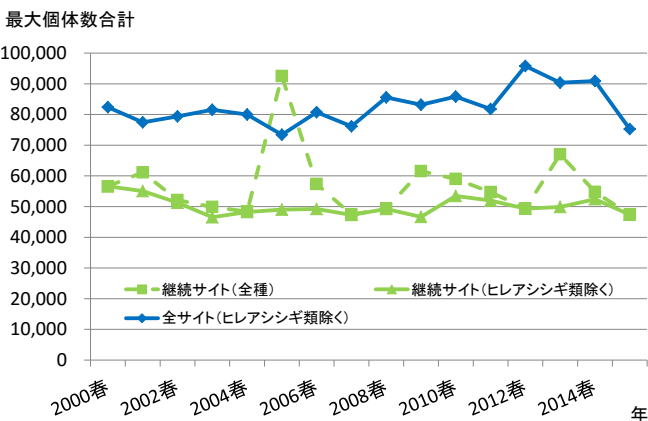


図1. 春期調査における継続調査サイトの全種最大個体数合計(赤)とヒレアシシギ類を除いた合計(緑)、ヒレアシシギ類を除いた全サイトの合計(青)の推移(2000年から2015年の継続サイトN=44)

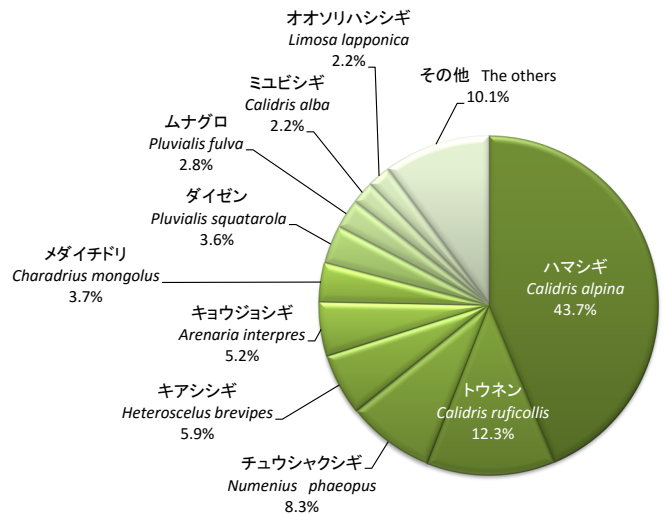


図2. 2015年春期調査の優占種

2000年からの連続して調査が継続されているサイトの「最大個体数の合計」と「ヒレアシシギ類を除いた合計」、「全サイトのヒレアシシギ類を除いた合計」を図1に示します。2015年春は個体数の変動の大きいヒレアシシギ類の観察が5羽と少ない年でした。ヒレアシシギ類を除いた合計では、全サイトでは2008年以降、継続サイトでは2010年以降、最小の値となりました。特に前年度春期と比べると減少の割合が大きくなっており、全サイトでは約15,000羽減少(-17.2%)、継続サイトでは約5,000羽減少(-9.6%)していました。次ページで減少要因の考察をします。

最大個体数における優占種の上位5種は、前年度春期と同様、ハマシギ(43.7%)、トウネン(12.3%)、チュウシャクシギ(8.3%)、キアシシギ(5.9%)、キョウジョシギ(5.2%)で、キアシシギとキョウジョシギの順位が変わった以外は、上位種に変動はありませんでした(図2)。特定の4種(ツクシガモ、クロツラヘラサギ、ヘラサギ、ズグロカモメ)では、4種とも前年度春期に比べ一斉調査期間でも全調査期間でも増加を示しました。

好天続きで渡りが早まった？

前年に比べて個体数が少なかった要因の一つとして、渡りが早かった可能性が考えられます。鳥がいつ渡っていくかは気象条件に左右されます。良い天気が続けば、順調に渡りを行い、日本に留まらずに素早く北方の繁殖地へ渡ってしまう可能性があります。そこで、春期調査期間である4月～5月の日本の天気概況を調べてみました。4月上旬は前線の影響で天気の崩れが多かったようですが、4月下旬～5月上旬は移動性高気圧に覆われて晴天が続き、南西からの暖かい風が流れ込み、特に北日本では例年に比べて気温が高かったようです(図3)。安定した天候と南

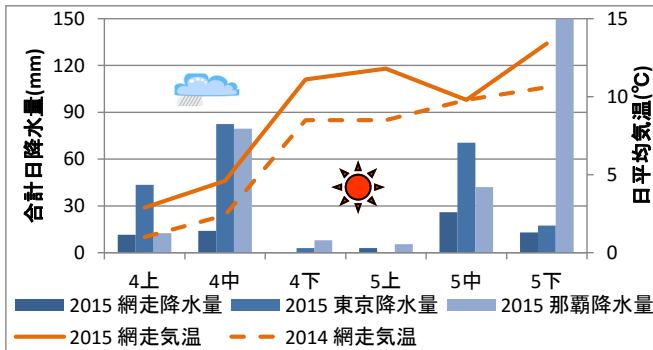


図3. 2015年4～5月の降水量(mm)と2014年と2015年の4～5月の網走の気温。4月下旬から5月上旬は降水量が少なく天気が安定していた。北日本では気温が高かった。

西の風は、北上する渡り鳥にとっては好条件です。そのため、2015年春期は、北上するシギ・チドリ類は日本にあまり滞在せず繁殖地に向かったため、調査で記録される個体数が少なかったのかもしれない。

内陸環境を利用するシギチが減少

2015年春期に個体数が多かった上位20種を表1に示します。そのうち2014年春期と比べて減少の割合が高かった種は、ムナグロ、オオソリハシシギ、タシギ、コチドリ、キョウジョシギで



写真1. ムナグロ

ました。これら5種は比較的水田などの内陸湿地や草地を採食場等に利用する種です。この5種のうち個体数の多い上位3種の旅鳥の経年変化を図4に示しま

表1. 2015年春期の最大個体数の合計上位20種と2014年比率。前年比-30%以上減少している種を青字で示す。

No.	種名	2014年 個体数	2015年 個体数	前年比 (%)
1	ハマシギ	37082	33550	0.90
2	トウネン	12594	9443	0.75
3	チュウシャクシギ	9036	6398	0.71
4	キアシシギ	5610	4530	0.81
5	キョウジョシギ	5776	3963	0.69
6	メダイチドリ	2836	2869	1.01
7	ダイゼン	2828	2794	0.99
8	ムナグロ	3746	2139	0.57
9	ミユビシギ	2069	1698	0.82
10	オオソリハシシギ	2650	1697	0.64
11	アカエリヒレアシシギ	2008	1505	0.75
12	アオアシシギ	1001	1038	1.04
13	ソリハシシギ	852	921	1.08
14	ミヤコドリ	613	684	1.12
15	シロチドリ	793	648	0.82
16	オバシギ	235	337	1.43
17	タシギ	507	330	0.65
18	コチドリ	444	298	0.67
19	ケリ	369	270	0.73
20	セイタカシギ	144	246	1.71

す。3種とも似た経年変化を示しています。利用環境等が似ているため、もしかしたら内陸湿地の環境変化が原因で個体数の増減が現れ、同様のパターンを示しているのかもしれない。日本だけではなく、他の中継地や越冬地を含めた東アジア・オーストラリア地域フライウェイ全体で、沿岸の干潟だけでなく、内陸湿地の環境悪化も懸念されており、そこを利用する種の今後の動向にも注意が必要です。



写真2. キョウジョシギ

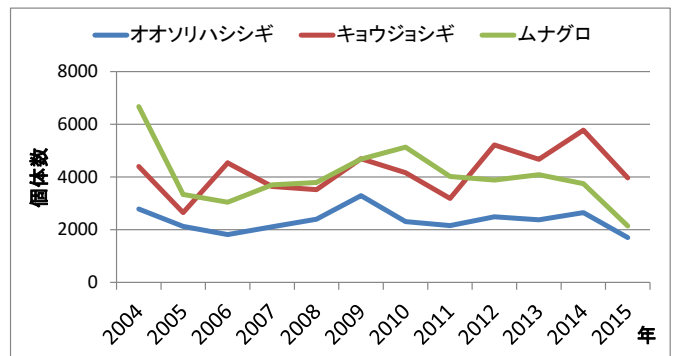


図4. 減少の割合が高い3種の個体数の経年変化。2005年に減少しその後2009～10年、2012～14年頃に増加し、2015年に減少するという似たパターンを示した。

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター タイトル写真: ミユビシギ・ハマシギ(守屋年史) 2015年 春期概要

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター <http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ <http://www.bird-research.jp/>

編集者 守屋年史・奴賀俊光 電話/Fax: 042-401-8661 メール: shigichi@bird-research.jp